
 論 文

多様性への寛容と包括的コミュニティの凝集性

梅本克*1

キーワード：秋葉原クラスタ、趣味縁コミュニティ、凝集性、多様性、寛容性

1 はじめに

地域特有の問題には、その地域に関わる人々の相互理解や助け合いが必要となり、コミュニティの存在が必要になる。特に、地域に関わるさまざまな集団の価値観や意見に齟齬がある場合、それらの集団を包括する大きなコミュニティが存在しなければ、地域内外で対立を引き起こしかねない。コミュニティとは、人々が帰属感や連帯感をもっている社会的集団のことである。ある街や地域など現実空間だけでなく、仮想空間でのネットワークでも存在できる。人々の空間的流動性が低かった時代にくらべると、今では地域社会での人々のつながりは弱くなり、コミュニティを形成することは難しくなっている。

たとえば、東京の秋葉原では、2005年頃から週末の歩行者天国で路上パフォーマンスが急増し、騒音やゴミ投棄などが特に地域住民にとって大きな問題であった。2008年の秋葉原通り魔事件で歩行者天国は中止になり、突如、路上パフォーマンスによる問題が消滅したものの、地域の安心安全と活性化の課題が地域の人々に押し掛かった。それまで価値観と利益が相反していた住民と事業者は、包括的な秋葉原地域連携協議会「アキバ21」を設立し、2011年に新たな形での歩行者天国を再開させることができた。

その後、日本のポップカルチャーの代表的な街であることと、免税店が集積していることから、秋葉原に訪れるインバウンド観光客の数が急激に増加し、特に中国人観光客の集団による大量購入が増えて、2015年には「爆買い」と呼ばれた。そこで交通渋滞やゴミ投棄などのオーバーツーリズムという新たな地域問題が

発生し、地域の安全安心を最優先に活動してきた包括的地域コミュニティも限界が見えてきた。しかし、オーバーツーリズムの問題は突然終わりを告げた。2020年の新型コロナウイルス感染症の世界的大流行のためである。

コロナ禍は、予想以上に長期に渡り、秋葉原の事業者に大打撃を与えた。コロナ禍の間に秋葉原で急増したのは、飲食店という形態をとりながら風俗営業に近いサービスを提供できるガールズバーが秋葉原のメイドカフェ文化を取り入れた「コンカフェ」と呼ばれる店舗である。これは東京都で感染拡大が続く中に緊急事態宣言が出され、都内の繁華街で営業継続が難しくなった風俗営業事業者が、秋葉原に「コンカフェ」を出店することで生き残りをかけたと思われる。これが新たな地域の問題を起こし、秋葉原が含まれる千代田区は、2021年より違法性のある「コンカフェ」を「偽装メイドカフェ」と命名し、摘発を進めた。2022年には関連事業者自ら「秋葉原コンセプトショップ協会」を立ち上げて違法な「偽装メイドカフェ」の摘発に協力している。

しかし、この新たな問題は、住民や他のジャンルの事業者には対応が難しく、それまでの包括的地域コミュニティには含まれていなかった「秋葉原クラスタ」と呼ばれる秋葉原の関係人口の協力が必要となってきた。秋葉原クラスタは趣味縁でつながった小さなコミュニティの集合体であり、住民コミュニティや事業者コミュニティともつながる構成員もいる、秋葉原特有のコミュニティである。現在、千代田区や秋葉原コンセプトショップ協会は、秋葉原クラスタの意見や知恵

*1 至誠館大学 現代社会学部

を取り入れて、秋葉原が抱える今の問題を解決しようと試みている。

秋葉原の例のように、地域特有のさまざまな問題を解決するためには、その地域の関係人口のコミュニティを含む、より包括的なコミュニティの形成が必要となる。どのようにして、そのようなコミュニティが形成され、効果的に地域特有の問題を解決に導けるであろうか。

2 コミュニティの凝集性モデル

地域のコミュニティが、その地域が抱える問題に取り組む場合、重要なことは、地域のコミュニティの構成員に、地域の問題を自分自身の問題のように感じられる共感能力があることである。そして、その共感から生じる協働を促すためには、地域のコミュニティへの連帯感と帰属感が必要である。これらはまとめてコミュニティの凝集性と呼ばれ、凝集性が強まっていく過程をコミュニティの形成として捉えられる。

地域のコミュニティの凝集性はどのように強まるのか、Simon (1957) のモデルを使って秋葉原の事例を考察する。このモデルは、集団の結束への圧力に含まれている力学システムを使っている。たとえば、ある問題が解決に向けて意見がまとまり、凝集性が強まる過程を、5本の方程式で表すことができる。まずコミュニティの凝集性、つまり人々がコミュニティに引きつけられる力の強度は、時間の関数である変数 $C(t)$ で表す。地域に関わる人々が取り組む問題に関する意見の差異の程度を表す相違性は変数 $D(t)$ である。 $P(t)$ は、地域に関わる人々に加えられる意見交換の圧力を表し、 $L(t)$ は、コミュニケーションを通じた他の人々への傾聴性を表す。そして $U(t)$ は、意見の差異を減少させるように加えられた統合性の圧力である。

以上の5変数に加えて、その問題が集団にとってどれほど重要かを、関連性 R として設定する。 R は時間から独立した媒介変数である。

これらの変数を使って、以下の5本の方程式で構成

するシステムを考える。意見の相違性 $D(t)$ の増加速度は (1) 式となる。

$$dD/dt = f[P(t), L(t), D(t)] \quad (1)$$

ここで、 $df/dP < 0$ 、 $df/dL < 0$ 、 $df/dD < 0$ である。これは、意見交換の圧力 P 、他人の意見への傾聴性 L が大きいほど、意見の相違性が解消される方向に向かうことを表す。意見交換の圧力 P については、(2) 式で定義する。

$$P(t) = P[D(t), U(t)] \quad (2)$$

ここで、 $dP/dD > 0$ 、 $dP/dU > 0$ である。これは、意見の相違性 D や統合性の圧力 U が大きいほど、意見交換の圧力 P が大きくなることを表している。他人の意見への傾聴性 L については (3) 式となる。

$$L(t) = L[U(t)] \quad (3)$$

ここで $dL/dU > 0$ である。これは、統合性の圧力 U が大きいほど、他人の意見への傾聴性 L は、大きくなることを意味する。そして、凝集性の増加速度 C については (4) 式となる。

$$dC/dt = g[D(t), U(t), C(t)] \quad (4)$$

ここで、 $dg/dD < 0$ 、 $dg/dU < 0$ 、 $dg/dC > 0$ である。これは、凝集性の増加速度 C は、直前の凝集性が大きいほどさらに大きくなるが、意見の相違性 D や統合性の圧力 U が大きいほど、減速することを表している。最後に、統合性の圧力 U は (5) 式で表される。

$$U(t) = U[C(t), R] \quad (5)$$

ここで、 $dU/dC > 0$ 、 $dU/dR > 0$ である。これは、凝集性 C

が大きいほど、また関連性 R が強いほど、統合性の圧力 U は強くなることを表している。

3 歩行者天国の無秩序化と通り魔事件

コミュニティの凝集性モデルの5本の方程式のうち(2)式、(3)式、(5)式を、 P 、 L 、 C について解き、このシステムを、次のように C および D に関する2本の微分方程式で表す。

$$dD/dt=f\{P[D,U(C)],L[U],D\} \quad (6)$$

$$dC/dt=g\{D,U(C),C\} \quad (7)$$

この2本の式がそれぞれ $dD/dt=f=0$ 、 $dC/dt=g=0$ となる経路から、均衡点が2つあることが分かる。1つは、意見の相違性 D が小さく凝集性 C が大きくなり、コミュニティが形成される均衡点である。もう1つは、意見の相違性 D が大きく、凝集性 C が小さくなり、コミュニティが形成されない均衡点である。ただし、均衡点に達する動きは多様であり、どちらか一方の均衡点をもつ場合と両方の均衡点をもつ場合がある。後者の場合、コミュニティが形成されるか否かは、意見の相違性 D と凝集性 C の初期値に依存することになる。

秋葉原の歩行者天国の事例では、各変数の計測データがないので、変数の初期値や2本の方程式の形状を知ることはできないが、状況から推論することは可能である。ここで分析対象となる集団は、秋葉原の住民と事業者からなる地域コミュニティと考える。コミュニティで話し合う問題は、歩行者天国の無秩序化とその被害をどのように対処するかである。

一般に商業地における住民と事業者の間の凝集性は高くない。また、秋葉原の場合、1990年代前半に家電バブルの崩壊で人気が少ない寂しい歩行者天国の状況を経験している秋葉原の人々にとっては、ある程度の歩行者天国での路上パフォーマンスは許容されていた。したがって凝集性 C の初期値は低かったと推測できる。その後、歩行者天国の無秩序化は、個々の事業者たち

では押えることは不可能になるほど急速に進んだ。秋葉原の住民と事業者の間にある意見の相違性 D の初期値は高かったと思われる。このように、秋葉原の歩行者天国の事例では、低い凝集性 C と高い相違性 D を初期値としていたと考えられる。

しかし、2008年を境に歩行者天国の様相が一変し、その環境の変化をきっかけとして、意見の相違性 D が小さくなり、凝集性 C が大きくなるような、コミュニティが形成される状態が、歩行者天国の再開までの3年間に急速に実現していたと考えられる。2008年の通り魔事件によって、歩行者天国の無秩序化がピークに達した時に、すべてを無にして環境を一変させ、街の安心安全こそが、秋葉原にとって最も大切なことだという共通認識が、秋葉原の人々に広がった。そのため、地域コミュニティの凝集性が一気に高まり、対策への意見の相違性が解消したため、2011年に新しい形の歩行者天国が復活できた。

4 オーバーツーリズムとコロナ禍

コミュニティの凝集性が高まり、歩行者天国の再開となった2011年には、ちょうど東日本大震災があった。すでに増えつつあったインバウンド観光客は一時的に秋葉原から消え、免税店は苦境に陥った。東日本大震災の直後に、秋葉原でもっとも回復が早かったビジネスは、アニメやゲームなどの多様なホビーショップとメイドカフェであった。当時100店舗ほど秋葉原に存在していたメイドカフェは、趣味縁でつながった多様な集団が形成する分散型自律的コミュニティ「秋葉原クラスタ」の避難所として機能していた。打撃を受けた免税店も、それまでつながりがまったくなかった秋葉原クラスタの行動に眼を付けて、ホビーショップやメイドカフェなどの異なる業種の事業者との協働が広がった。

幸い、インバウンド需要はすぐに回復したが、2010年代後半には、オーバーツーリズムの問題が発生した。2000年代の秋葉原の再開発時には、これほどまでイン

バウンドが増加することは予想していなかったため、大型バスを留める駐車場が秋葉原にはなく、中央通りに多くの大型バスが連なる状況が日常となった。店内だけでなく路上にもインバウンド観光客が溢れ、それ目当ての客引きやゴミ投棄も増えた。街は活気づいたが、地元住民と事業者たちのコミュニティによる安心安全をモットーにした歩行者天国の運営は限界に達し、その存続も危機的状態となっていた。新たな問題により、住民と事業者の意見の相違性は高まりつつあったが、街の包括的コミュニティが維持できたのは、東日本大震災以降、地域ネットワークの仲介的存在となった秋葉原クラスタが凝集性を高めていたからである。

しかし、歩行者天国の問題と同様、2020年からのコロナ禍でオーバーツーリズムの問題は瞬時に消滅した。しかし、2008年の通り魔事件や2011年の東日本大震災とは異なり、コロナ禍は長期間に渡って、秋葉原の状況を悪化させ続けた。特に東日本大震災の時と大きく異なるのは、インバウンドの消失が2年に渡ったこと、メイドカフェやアイドルライブ劇場など、秋葉原クラスタの避難所的役割を担う場が、活動制限を受けたことである。この状況で新たな問題が秋葉原に起こった。緊急事態宣言で存続の危機となった新宿や渋谷など他地域の繁華街の風俗営業店が秋葉原に挙って避難してきたのである。コロナ禍の2年間で秋葉原のメイドカフェに擬態した「コンカフェ」と呼ばれる店舗は急増し、2020年には200店舗以上にも膨れ上がった。それらは秋葉原のブランドにただ乗りして、求人や広告では「メイドカフェ」と名乗るが、秋葉原クラスタが溜まり場として利用するメイドカフェは10店舗ほどしか現存していない。しかも一部のコンカフェは、地元の千代田区が「偽装メイドカフェ」と名づける違法な店舗で摘発を受けている。

この新たな問題に対し、既存の地元住民と事業者による地域コミュニティでは対応は不可能であった。実際、偽装メイドカフェが侵入してきた空き店舗のオーナーは、地元住民が大半であるが、メイドカフェに擬

態して違法性が判断しづらいことと、コロナ禍による経済状況の悪化で、違法店の侵入や排除も難しい状態である。そこに必要となるのは、もともと秋葉原の問題に対して当事者意識があり、積極的に関わろうとするコミュニティである秋葉原クラスタである。彼らのコミュニティの凝集性の初期値は大きく、地域問題の関連性 R もかなり大きい。意見や価値観の相違性 D も大きい、統合性の圧力 U はかなり低い。秋葉原クラスタは、意見は違ってもよいという立ち位置で、つまり、 $dU/dC=0$ 、 $dU/dR=0$ となり、統合性の圧力は、凝集性や関連性から独立している。つまりコミュニティの形成過程が、意見の相違性と統合性の圧力から独立している特異なコミュニティである。なぜなら、秋葉原クラスタには多様性への寛容が、著しく高いことが観察されるからである。

5 多様性への寛容を含むモデル

差異への寛容性の概念を取り入れたモデルは、Mutual Intergroup Differentiation Model (Hewstone and Brown 1986) である。このモデルは、包括的コミュニティを構成するグループの差異を互いに尊重することの重要性を強調し、互恵的な相互依存によって、包括的コミュニティ自体の凝集性が高まることを示している。相互依存とは、包括的コミュニティが有する問題の解決に、それぞれの構成グループが、等しく貢献する意味でもあり (Sherif et al. 1954)、その結果、各グループが全体の補完的な役割を担うことになる。それぞれの立場の差異を排除しようとするのではなく、各グループの特性や強みを同等の価値があると認めて、それを活かすのである。

Jones et al. (2000) の説明に従うと、この MID モデルでは、多様性は、包括的コミュニティである「秋葉原クラスタ」として重要な価値があるとされるため、その構成グループである各々の「趣味縁コミュニティ」の価値観やライフスタイルは、秋葉原クラスタにおいても尊重される。これにより、秋葉原クラスタ内で意

見を一致させる統合性の圧力の必要性は低下し、マイノリティな趣味縁コミュニティでも、自身の意見や価値観などアイデンティティが失われるリスクは回避される (Stanley 2003)。

このことを、先の Simon モデルで表すと、趣味縁コミュニティの5本の方程式から成り立つシステムは同じだが、趣味縁コミュニティの集合体である秋葉原クラスタの凝集性の増加速度については次のようになる。

$$dC/dt = \sum dC_i/dt = \sum g_i [D_i(t), U_i(t), C_i(t)] \quad (8)$$

ただし、すべての異なる趣味縁コミュニティにおいて $dg_i/dD_j=0$ 、 $dg_i/dU_j=0$ 、 $dg_i/dC_j=0$ となる。これは、それぞれの趣味縁コミュニティ間の価値観や状態の差異は相互に影響を与えず、包括的コミュニティとして秋葉原クラスタの凝集性の増加速度 C は、趣味縁コミュニティの凝集性の単純和となることを意味する。それぞれの趣味縁コミュニティ間のアイデンティティの差異への寛容性が極めて高いためである。そしてもう一つ、秋葉原クラスタの重要な特徴は、秋葉原の問題への共感度、つまり関連性 R がそれぞれの趣味縁コミュニティにおいて共通して、かなり大きいことである。

2020年を境に、コロナ禍で秋葉原全体の様相が一変したが、歩行者天国の問題とは異なり、現在の問題は秋葉原ブランドをただ乗りする外部地域からの悪意ある侵入者が存在するため、地域の包括的コミュニティの凝集性は高まる方に力が掛かる。しかし、未知の敵に対処するため、意見の相違性や意見の統合性の圧力が高まり、凝集性を弱める方に力が働く。そのため、秋葉原は今まさに混乱状態にあると言える。必要なことは、これまで地域コミュニティから疎外されていた秋葉原クラスタを包括的な地域コミュニティに積極的に迎えることである。地域への関連性が高く、差異に寛容な多様性を持つ秋葉原クラスタの凝集性を加えることで、地域の問題に対処する包括的コミュニティの凝集性も増すことにつながるからである。

ただし、多様性に寛容な包括的コミュニティを形成するためには、趣味縁コミュニティのアイデンティティが相互に尊重されたように、Mummendey and Wenzel (1999) が指摘する、権力が集中する傾向がある多数派集団がコミュニティ内に支配的な役割を果たすことがないように注意が必要である。そのためには、Hornsey and Hogg (2000) で述べられたように、マイノリティ集団の視点や価値観などのアイデンティティを理解し、コミュニティ内で尊重することを明示することが必要である。

6 さいごに

地域の包括的なコミュニティの形成は、その地域の課題や問題を解決に導く重要な基盤である。ただし、誰がそのコミュニティに含まれるか、そのコミュニティ内でどの程度の多様性が許容されるかを考慮に入れる必要がある。包括的コミュニティが互恵的な効果を発揮できるのは、秋葉原クラスタのように、マイノリティも含む多様な集団のアイデンティティの差異を理解し尊重する寛容性を伴う場合に限られる。多様性への寛容は、自律的で相互補完的なコミュニティを形成し、安定的で持続的な凝集性を持つ効果的な手段である可能性がある。

[参考文献]

- 1) Hewstone, M., & Brown, R. (1986). *Contact and conflict in intergroup encounters*. Oxford, England: Basil Blackwell.
- 2) Hornsey, M. J., & Hogg, M. A. (2000). Subgroup relations: A comparison of the mutual inter-group differentiation and common ingroup identity models of prejudice reduction. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 242–256.
- 3) Jones, J. M. et al. (2000). Toward a diversity hypothesis: Multidimensional effects of intergroup contact. *Applied and Preventive Psychology*, 9, 53–62.
- 4) Mummendey, A., & Wenzel, M. (1999). Social discrimination and tolerance in intergroup relations:

Reactions to intergroup difference. *Personality and Social Psychology Review*, 3, 158–174.

5) Sherif, M. et al. (1954). Experimental study of positive and negative intergroup attitudes between experimentally produced groups: Robbers cave experiment. Norman: University of Nebraska Press.

6) Simon, H. A. (1957). *Models of man; social and rational*.

Wiley.

7) Stanley, D. (2003). What do we know about social cohesion: The research perspective of the federal government's social cohesion research network. *Canadian Journal of Sociology*, 28, 5–17.

Tolerance for Diversity and Cohesiveness of Inclusive Communities

Masaru UMEMOTO

abstract : Forming an inclusive community in a region is an important basis for solving the problems of that region. However, the extent to which diversity is allowed within the community is the cornerstone of the community's problem-solving ability. An inclusive community can exert a mutually beneficial effect only when it is accompanied by tolerance to understand and respect the differences in the identities of diverse groups, including minorities, as in the case of the Akihabara cluster. In this paper, we show that tolerance for diversity is an effective means of forming self-sustaining and mutually complementary communities and having stable and lasting cohesion.